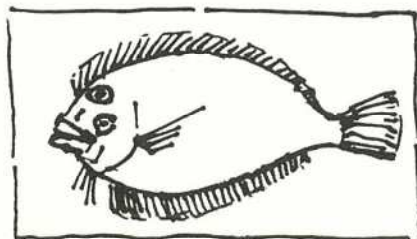


OMNIBUS

大阪医科大学図書館報 / 大阪医科大学附属看護専門学校図書室報

C	O	N	T	E	N	T	S
医事紛争明日は我が身の臨床医〔阿部宗昭〕	_____	_____	_____	_____	_____	_____	2
アメリカ研究生生活を振り返って〔久保川学〕	_____	_____	_____	_____	_____	_____	3
カリフォルニア大学ロサンゼルス校へ看護短期留学を体験して〔濱中由美〕	_____	_____	_____	_____	_____	_____	5
旅行ガイドブックがある本学図書館〔宮崎真紀〕	_____	_____	_____	_____	_____	_____	7
図書館利用状況	_____	_____	_____	_____	_____	_____	7
他大学図書館訪問記（大阪薬科大学図書館の巻）	_____	_____	_____	_____	_____	_____	9
書評「ノーベル・フラウエン」〔境 晶子〕	_____	_____	_____	_____	_____	_____	10
学術情報センター電子図書館システム説明会に参加して〔宮本高行〕	_____	_____	_____	_____	_____	_____	11
古典「宮園節」の由来について〔門田雅人〕	_____	_____	_____	_____	_____	_____	12
本学教職員等著作寄贈	_____	_____	_____	_____	_____	_____	13
お知らせ	_____	_____	_____	_____	_____	_____	14
平成8年度図書館統計	_____	_____	_____	_____	_____	_____	15
図書館業務日誌	_____	_____	_____	_____	_____	_____	16
編集後記	_____	_____	_____	_____	_____	_____	16



T.K.

医事紛争明日は我が身の臨床医

阿部宗昭



図書館が新装されて早や2年半になる。新図書館が設備、機能の面で旧館と比べものにならないほど素晴らしいものとなったことは、利用している人全てが感じておられることと思う。書架スペースや閲覧コーナーが広くなり膨大な医学、看護学関係の図書以外にもコンピューター関係を始めとする実用書、旅行案内や道路地図まで蔵書に加わり、教職員や学生にとって至れり尽くせりといっても過言ではあるまい。先日、雑学に類する書架を覗いていたら医事紛争に関する図書が数冊並んでいるのに出くわした。この小文のタイトルは、その中の一冊にあった医事紛争防止いろは歌の冒頭の一節である。

本学の教職員のほとんどは医療訴訟とは無縁であろうと思うが、患者が気付かない程度のちょっとした事故やケアレスミスを経験してない人は少ないのではなからうか。小さな事故やミスであっても患者の治療経過や予後に影響を与えるようなものは、医師やコメディカル職員の対応如何によっては医事紛争となる種を宿している。

医療訴訟は年々増加しており、20年前には1000件に達していなかったが、現在は2000件に倍増しているという。Medical malpractice crisisと呼ばれる異常事態を引き起した米国の訴訟件数までには程遠いが、今後も増えることはあっても減少することはなさそうである。訴訟が増えている背景には、第1に患者の権利意識の高まりがあげられる。その代表がinformed consentであり、文書による同意が求められることが多くなってきた。医師にまかせて黙って従いなさいというかつてのパターナリズムは通用しない時代である。十分な説明をして患者に同意を得るだけでは不十分であり、カルテ上に記載していたかどうか訴訟の際に問題となる。第2はマスコミ等による偏った医療情報の提供である。HIV訴訟や医療費の不正請求、医療過誤の報道は医師に対する不信感を増幅する。第3は医師間、医師とコメディカル間のコミュニケーション不足である。AとBで診断や治療方針が違っていると患者は不安を感じたり不信感を抱きやすい。前医と後医の関係は特に重大である。本学の医師は後医となることが多いと思うが、前医での診断や治療に関する後医の批判や非難が医事紛争のきっかけとなることが少なくないと言われている。医事紛争の発生率は、昭和50年では診療所54%、病院46%であったが、平成6年には診療所28%、病院72%となり、7割以上は病院である。当院での係争中の医事紛争は4件であるが、紛争にまでなっていないものも含めると1診療科に1つや2つはあるのではなからうか。

医事紛争とは、医療過誤と医療事故に関連して患者側が医療関係者にクレームをつけることである。医療事故には医療関係者の過失によるものもあるが、不可抗力的な事故もあり、医療関係者の責任が問われないものも多い。一方、医療過誤は医療関係者のミスによるもので、ケアレスミスから無知によるものまで様々である。ケアレスミスはあってはならないが、患者の生命を脅かすまでには至らぬようなミスは日常の医療行為の中で起り得るものである。現に私の科でも最近、体内にガーゼを残してしまうケアレスミスが発生した。術後早期に偶々、撮影したX線像で鉛入りのガーゼが見付き、患者にこちらのミスを謝って直ちにガーゼを摘出した。今のところ紛争にはなっていないが、日が経ってから他医で見つかった場合は訴訟となったであろうと胸をなでおろしている。

医療過誤と医療事故は患者やその家族のみならず医療関係者をも不幸にする。医療過誤を起さないよう常に注意をはらい、過誤や事故が起り得ないようなシステム作りが必要なことは言うまでもないが、万全を期しても起らない保証はどこにもない。医事紛争に至るかどうかは、常日頃の患者とのコミュニケーションがうまくとれているかどうかにかかっているのではなからうか。紋切り型の同意文書に印鑑を押させばよしとするのではなく、患者と家族に真に納得のいく医療が行えるようにしたいものである。

(あべ・むねあき 整形外科学教授)

アメリカ研究生活を振り返って

久保川 学

私が留学したイェール大学 (Yale University) はニューヨークとボストンとの間の大西洋岸の小都市、コネチカット州ニューヘブーンにある1701年に創設された大学である。現在は学生総数約1万人、研究者数約6千人、教授約2千人の総合大学で、ニューヘブーンのダウンタウンの中心から南北に約3kmに渡るキャンパスを有し、医学部はその最南端に位置する。私は平成5年1月から7年3月末までこの医学部の細胞分子生理学教室で研究生生活を送る機会を得た。当時のアメリカといえ、不況に犯罪といった暗い話題が多く、家族を連れて渡米することになった私には不安材料ばかりが眼につき、出発前から“とにかく無事に帰国出来るように”という祈りにも似た思いがあった。

アメリカ到着の翌朝、ニューヘブーンのダウンタウンにある高層ホテルから外を見下ろすと、街は一面雪景色であった。ダウンタウンの中央には広い正方形の広場があり、その右手にオフィスビルが並び、左手には中世ヨーロッパの城を思わせるようなイェール大学の建物が遠くまで連なっていた。空はどんより雲っており、まるで北欧へでも来たような眺めであった。ニューヘブーンは大きな街ではないが、都会同様に治安はあまり良くなく、大学の要所には必ずイェール警察のパトカーが配置されており学生や研究者の安全を確保している。また、全米第二の規模を誇る大学中央図書館は一般市民にも開放されているが、とくに出入りの際に手荷物のチェックが厳重であった。昼間に街の中を歩いている時には人通りも多く、とくに危険な感じは全くないが、早朝や夜の一人歩きはたとえ大学構内でもやめた方が良くのことであった。もし危険な面に会っても、そんな時間にうろうろしている人間の方が悪いのである。

細胞分子生理学教室は医学部のほぼ中央に位置するスターリングホールという建物にある。義務は研究だけという気楽な身分のはずだが、周囲の雰囲気はなかなか厳しいものがあつた。当時、この教室だけで14人の教授がそれぞれ研究室を構え、総勢約60人の研究スタッフが競って成果をあげていた。私のいた研究室のギービッシュ (Gerhard Giebisch) 教授は細胞分子生理学教室の中では長老的存在であり、NIHからの研究費も多額で、我々研究者としてもそれなりの成果をあげる必要があつた。そもそも私がギービッシュ教授の元へ行ったのは、研究室の中心的存在であつた中国系のワン氏がニューヨーク医科大学へ助教授として赴任することになったため、その代わりに研究者を求めて当時の藤本教授 (現学長) に手紙を送って来たのがきっかけである。ワン氏はすでに数多くの優れた成果をあげており、彼の代わりにするには少々荷の重い役であつた。また、成果の出せない研究者は落ちこぼれて行くという環境がより気分を重くしていた。研究者数は多いが共同研究はあまりなく、全員がお互いに競いあっている感じで、うわべだけは笑顔であるが、いざ実験のことになると極めて非協力的である。そのため実験を軌道にのせるだけで約半年を費やしてしまつた。

私が行つた研究はラットの腎尿細管を単離し、その細胞膜に存在するイオンチャネルの調節機構をパッチクランプ法という手法を用いて解明して行くものである。実験自体は非常に興味ある内容であつたが、手技的には困難な面が多く効率は良くない。それでも何とか成果を出さなければならぬ。まさに隣人との競争でもあり、アメリカで生き抜くことの厳しさを身を持って感じた日々で

あった。幸い、一年目以内にかかなりのデータを得ることが出来、ギービッシュ教授はしばしば私のデータを学会などで発表し満足そうであった。但し、学会発表者の中に私の名前はなかった。アメリカは自己主張の国でもある。黙っていても、いくら良い研究成果をあげても無視される。自力で外に出て行って発表するしかない。一年半を過ぎた頃には二つのテーマに関する研究が完成に近づいたので、学会に思い切って二つの演題を出したり、また毎年恒例の細胞分子生理学教室の合宿セ



ギービッシュ研究室のバッチクランプ仲間。

左からマックニコラス女史、ワン氏、ギービッシュ教授、筆者。

ミナーでも積極的に研究発表を行ったりした。実際、何ら特別なテクニックを持たず、英語力もない私がこのような環境でやって行くには現地の人々の倍の仕事をしてやっと人並みに扱われるのである。

ただ、第三の研究テーマは残念ながら不成功に終わった。約半年を費やしたがどうしても思った結果が得られない。この間に先の研究テーマに関する論文を仕上げたりしたが、今回のテーマはだめだとギービッシュ教授を納得させるのに苦労した。その後、第四の研究テーマに四苦八苦

している内にアメリカ生活三年目に入った。その1月17日の夕方、研究室で実験をしていると妻から電話があり、神戸で大地震があったことを知った。あわてて家に帰り、テレビを見ると高速道路が倒れ、神戸の街の至るところから煙が立ち昇っている映像が映しだされていた。信じられない思いで日本へ電話をかけたが一向に通じない。私達は徹夜でテレビを見ながら、日本へ電話をかけ続けていた。翌朝はギービッシュ教授の誕生日パーティーがあった。笑顔で歓談している人々にとって神戸での地震は遠い異国の出来事に過ぎないのだろう。私はただ沈鬱な思いでその席にいた。

第四テーマに関する研究も進み始め、論文執筆も開始したが、同時に帰国予定日も近づいた。「また来れるか？」としきりに尋ねるギービッシュ教授に「もし出来れば。」とだけ答えながら、私は追加実験やデータ整理に没頭していた。帰国直前にまた日本のニュースで新聞の一面が埋まった。東京での地下鉄サリン事件である。危ないと思っていたアメリカ生活では一度も危険を感じたことはなかった私達には日本の方が危険ではないかと思えるほどであった。帰国前日、私の送別会が行われた。すっかり顔見知りになった他の研究室の人々とも別れの挨拶をし、その日は夜遅くまで研究室で机の整理などをしていた。

アメリカでの研究生活は熾烈な競争を伴っている。成果があがれば道は開けるが、そうでないと、現地の研究者は明日の生活さえ心配しなければならない。数人の日本人がアメリカで研究を続ける

ために頑張っていたが、私にはこの厳しい環境で生き抜く程のバイタリティーはなかった。ともあれ、私の見たアメリカはあらゆる人種の人々が住む世界の縮図であり、広大な土地と自由な精神から溢れるエネルギーには底知れぬものがあるように感じられた。

(くぼかわ・まなぶ 第二生理学助教授)

カリフォルニア大学ロサンゼルス校へ 看護短期留学を体験して

濱 中 由 美

看護学生国際交流研究会の企画した約一ヶ月間の留学に参加した動機は、自分にとって看護とは何かと感じたことと、以前から外国の医療に大変興味があったからです。

スケジュールは、月曜～金曜の午前中が看護の講義で午後は英語のクラスに参加したり、週に2～3回の見学などでした。

内容は、大学での講義、大学病院の病棟、ICU、透析センター、カイザーホスピタルの救命救急センター、AIDSのホスピス、老人ホームなどの見学・訪問や患者さんとコミュニケーションをとったりでした。

また、授業は、アメリカの看護や看護制度・資格について、倫理、AIDSやターミナル期の患者さんへの看護や指導・教育についてなどでした。AIDSの講義では、実際に患者さんから話を聞かせて頂くこともできました。講義はもちろん英語でしたが、予定もわかっていたので予習したり質問したい内容を英文に直しておくこともできました。またいつもと違う環境で学ぶために、「何を学びたいのか」「日本や自分の病院ではどうであるか」を踏まえて臨むと種々の視点から多くの事を気づくことができると感じました。

宿泊先は、大学院の寮でした。世界中から年齢層も幅広く色々の勉強や研究に来ている人が集まっていました。3日間はホームステイを経験することができました。アクティビティも充実しIDカードで大学の敷地内のジムやプールやテニスコートも自由に利用できました。350円で最新の映画が見れたり、ドジャースタジアムで野茂の試合を見てウェーブを体験したり、ディズニーランドやハリウッドやユニバーサルスタジオへ遊びに行ったりしました。天気も良く年中温いのでサンタモニカやマリブーのビーチでサーフィンを楽しんだりもしました。

学んだことや感じたことは多くありますが、特に印象に残ったことを書きます。

アメリカの看護はというより、私の見てきたカリフォルニアのロスの一部ですが、ナースのレベルとして高卒や専門学校卒はほとんどいませんでした。それどころか大卒でもただのRN（正看）は殆どリストラされているということでした。これはコストの低下と大学院卒のスペシャリストが多く出てきたからだそうで、スペシャリストとして多いのは心電図などモニタリングのスペシャリスト、癌、ペインコントロール、移植のスペシャリストなどです。この人達は、麻酔もするし縫合などの処置もします。私はDrとの線がどこで引かれているのだろうと感じました。カリフォルニアでは看護助手も州の認定試験を受けなければなりません。そしてADL援助のほとんどは助手によ

り行われ、特に問題の無い移送や雑用は退職された後などにボランティアとして働いている300人程の人達により行われていました。

ICUでは24時間、家族は自由に入出入りできます。そして患者が脳死の様な状態でも側にいて体をさすったり話しかけたりしていました。驚いたことはガウンテクニックやスリッパのはきかえなどがなく、それでも感染は0%だということでした。

告知については患者には自分の病名を知る権利があるから、もし、しなければ医師が訴えられるケースが多いそうです。

末期患者の病棟では牧師さんが来たりしていました。病院で死を迎えるケースは少ないようですが、日本ならお坊さんが病棟に来るなんて縁起でもないという感じになると思います。国柄により死に対する受け入れが大きく異なるのだと感じました。



老人ホームにて
後列左側が筆者

日本は高齢化社会になり病院経営も大変になってきていますので、看護婦の質の向上とコスト低下のためのリストラ、看護大学が増え准看は廃止され、ナースがマネジメントまで考えなければならぬ日も近いと思います。

最終日に倫理の講義を受けて感じたことは、どんなに医療技術や薬や科学が進んでも、ナースが手を使って目で見て患者に触れるという行為は絶対必要だと思いました。また、日本人のナースは細かい配慮がよくできるとも言われました。今の日本は10年前のアメリカです。アメリカは確かに進んでいるけれど元に戻りつつあるとも言われ、それをそのまま日本に持ってきても良いはずがありません。基本的なことや病人の心理はどこに行っても変わらないと思います。アメリカの良いところは吸収し日本の良い所はもっとのばしcureよりcareの看護の独自性を確立していかなければならないと感じました。

視野を広げることで看護についても自分の長所や短所についても見つめ直す良いチャンスでした。やらないというのはできないよりも残念だと思うので、感受性の豊かなうちに多くの経験をしたいと思います。今回の参加にあたりご協力、ご支援頂いた皆様にとっても感謝しています。

(はまなか・ゆみ 第二看護学科2年)

旅行ガイドブックがある本学図書館

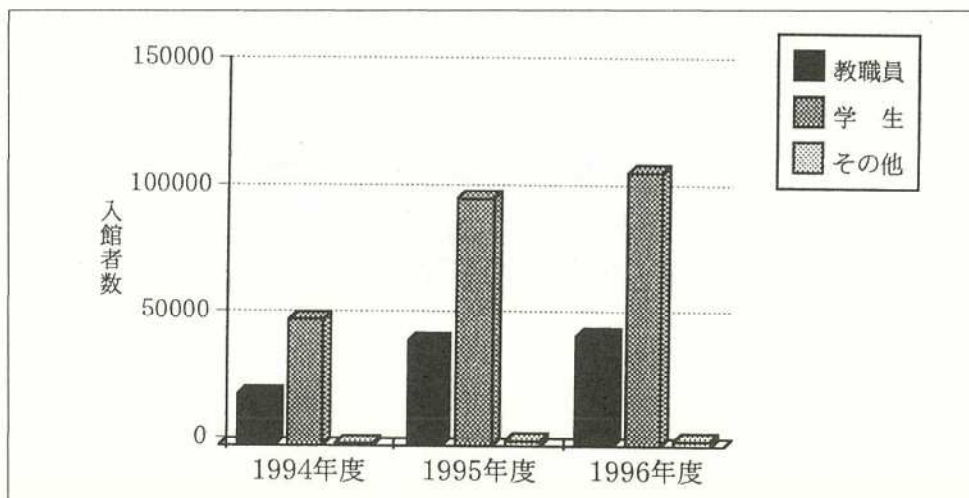
宮崎真紀

もう、すでに知っている人も多いと思うが、うちの図書館には、旅行ガイドが置いてある。旅行ガイドと言うと、何だか堅く聞こえるが、ぶっちゃけた話、「地球の歩き方」のことである。ここが不思議なところなのだが、他にもマンガや英会話の教材一式、アニメや洋画のビデオなどがあつたりする。小中高の口うるさい図書館を見てきた私にとって、これは軽いカルチャーショックであった。とまあ、それはさておき、話を元に戻すとその「地球の歩き方」であるが、夏休み、春休みといった大きな休暇の前になると、ごっそりその姿が消えてしまう。人気が高いのは、ヨーロッパ方面。一応、世界各国別にひと通り揃っているようなのだが、私は、ヨーロッパ各国を一度に紹介している第一巻、その名も「ヨーロッパ」を一回見たっきりだ。「ヨーロッパ鉄道の旅」というのも、しばらく見ていない。それだけ、ヨーロッパに旅する、あるいは、旅する予定の人が多いうことだろうか。ガイドブックというのは、書店で求めるにも、金額がバカにならないわけで、人から借りることができるなら、それにこしたことはない。日本から、特に遠く離れた国へ行くなら、なおさらである。一生のうちに、何度も訪れるわけでもないのに、わざわざでっかい本を買うのは少々もったいない気がする。しかも、旅の情報というのは、年々変わるものなのだ。このような事情を察するに、図書館の棚から、かの本がいなくなるのも、うなづける。ところで、ここで一つ、素朴な疑問なのだが、「地球の～」を借り出した皆さんは、実際にそれをもって、旅行に行っているのだろうか？ 私自身、本をそっと手にとって臭いをかいでみるが、独特のカビくさい臭いがするばかり。異国の情緒や香りは、どこへやら。ましてや、本自身は黙して語らず。でも皆さん、本を旅のお供にするのはいいんですけど、旅先でなくさないように気を付けましょうね。

(みやざき・まき 5年生)

図書館利用状況

1. 入館者数

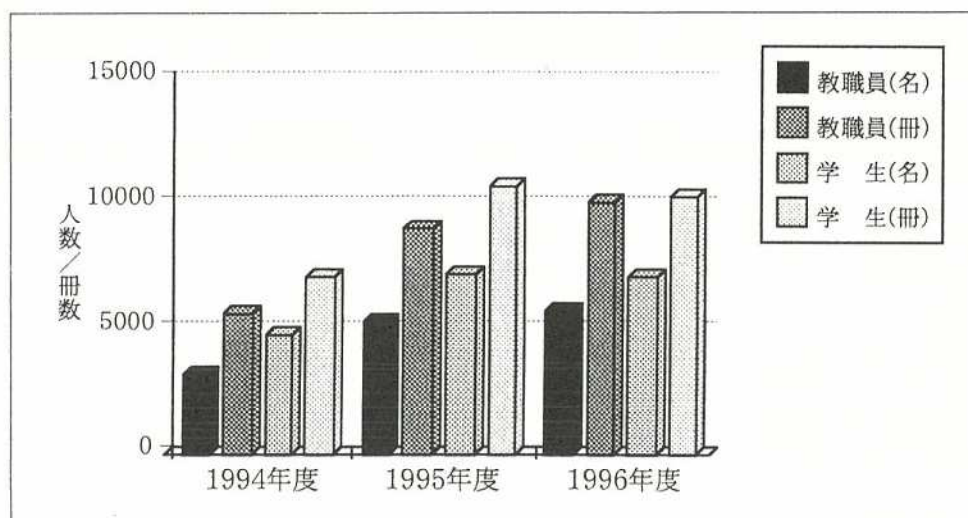


	教職員	学生	その他	合計	1日平均
1994年度	20470	49817	597	70884	440
1995年度	41468	98086	2421	141975	486
1996年度	44001	108530	2220	154751	541

(1994年度は、9月5日から翌3月31日まで)

1996年度の入館者数は、1995年度に比べ全体で9%の増加です。教職員では6%の、学生では11%の増加となっています。

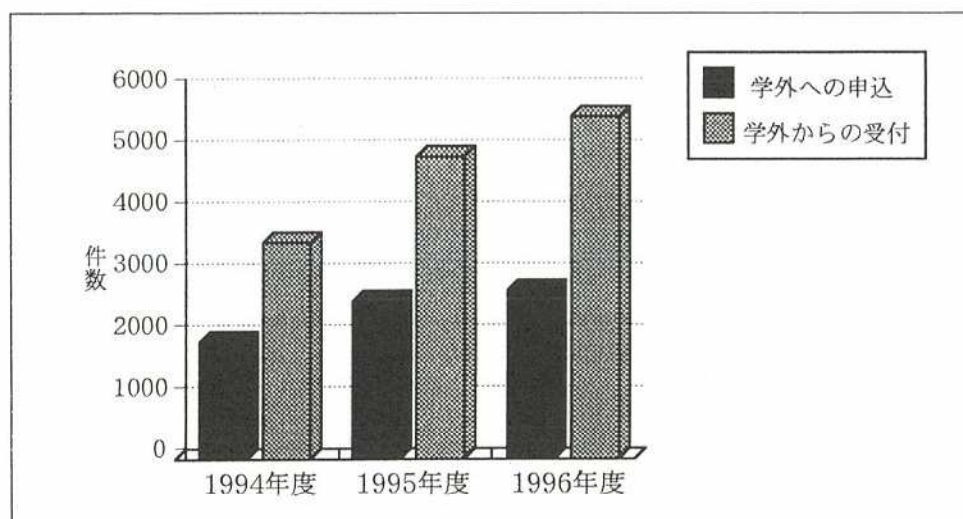
2. 貸出



	教職員(名)	教職員(冊)	学生(名)	学生(冊)
1994年度	3212	5675	4779	7112
1995年度	5300	9055	7240	10735
1996年度	5777	10136	7088	10327

1995年度に比べ、1996年度は、教職員で貸出者数が9%、冊数も12%の増加ですが、学生では貸出者数が2%、冊数も4%減少しています。

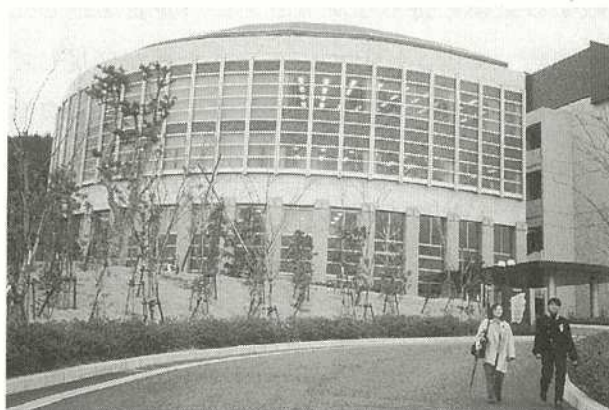
3. 相互貸借



	学外への申込	学外からの受付
1994年度	1919	3505
1995年度	2586	4932
1996年度	2760	5583

相互貸借では、1995年度に比べ、1996年度は学外への申込が7%の増加、学外からの受付が13%の増加となっています。

大阪薬科大学は、1953年に設置された大学で、以前は大阪府松原市にキャンパスがありましたが、1996年4月に高槻市に移転して来られました。キャンパスは、高槻赤十字病院の北、奈佐原4丁目にあります。



本部・図書館棟

キャンパスの正門を入ってすぐ左手に4階建ての本部・図書館棟があり、建物南側の半円形となった部分の3階および4階が図書館です。

3階でエレベーターを降りると、まずブラウジングコーナーになっていて、各種新聞等が備え付けられています。

図書館の入口は、その右手にあり本学図書館と同様に入退館システムが導入されています。入口は、やや狭い感じもしますが、館内に入る

と左手にカウンター、正面に4階への階段があり吹き抜けとなっていて、本学と違って窓からすぐ外が見渡せてより開放的な空間となっています。

3階部分は、第1閲覧室として和・洋の新着雑誌および1990年以降の製本雑誌、参考図書等が配置されています。また、グループ学習室が2室あり、ここは図書館に入館せずに利用できるようになっています。

4階部分は、3つの部分に別れていて、第2閲覧室に一般図書、文庫本、一般教養雑誌、自然科学系和図書が、第3閲覧室に自然科学系和・洋図書、辞書類が、第4閲覧室には移動式書架が設置されて1989年以前の和・洋製本雑誌、発行年の古い和・洋図書、他大学紀要類、二次資料等が配置されています。また、AV利用室およびニューメディア情報室も設置されています。

各階ともに、南向きに窓があり高槻市内の眺望もよく、天気がよければ大阪市内まで望めるということでした。

1996年3月31日現在の蔵書数は、6万5千冊、受入雑誌数は、408誌です。

サービス対象者は、約1500名で本学よりは少な目ですが、約1300名が学生となっています。

本年4月からは、図書館システムが導入され稼動しています。本学も次期システムを考えるに当たり、参考にさせていただきたいと考えています。

今後、高槻市内にキャンパスを持つ医学と薬学という関連分野の大学図書館として、互いにより刺激となっていければと思っています。



閲覧室(4階)

(福広)

ノーベル・フラウエン：素顔の女性科学者

U・フェルシング 著 田沢 仁・松本友孝 訳

学会出版センター 1996年

境 晶 子



この本は、自然科学の分野でノーベル賞を受賞した9人の女性と、彼女たちに匹敵する業績を持ちながらもノーベル賞を逃した5人の女性科学者の物語である。1901年にノーベル賞が発足してからこの本の原著がドイツで発行された1991年までの間に、自然科学分野での女性の受賞者は10人（マリー・キュリーは1903年に物理学賞、1911年に化学賞を受賞している）である。この数は全受賞者の約2%と少なく、同時に現在の大学や研究所で高い地位を占めている女性研究者の数を反映している、と著者は述べている。本書を読むと、女性に対して学問の道が閉ざされていた時代において優れた業績を残した彼女たちの生きざまに圧倒されるものがある。

本書に登場する14人の中で一番印象に残ったのは、イレヌ・ジョリオ＝キュリーとバーバラ・マクリントックの2人である。イレヌ・キュリーは最初の女性ノーベル賞受賞者であるマリー・キュリーの長女である。イレヌが生まれた時マリーは最初の自主的な研究を完結するのに没頭していた時期であり、その母親の代わりにイレヌを世話し博物学や植物学へと導いたのは祖父であった。成長したイレヌは大学教授となった母親やその同僚のもとで高いレベルの教育を受けた。彼女は母親と同様の道をたどり、核物理学に従事し同じ物理学者と結婚した。イレヌと夫は密接な研究共同体となり、その成果として共同で化学賞を受賞した。イレヌは同時に良き母親でありまた平和主義推進者でもあり、女性科学者としての一つの理想的な人生を歩んだのだと感じた。学問的に恵まれた環境ももちろんそうであるが、夫と共に学び合い、それぞれが厳しい批判者となりうるパートナーを得たことは、彼女が研究を進めるうえで有形無形の大きな励みになったと思う。彼女にとって学問的に充実していた時期は、同時に家庭でも幸福な時代であったことがうかがえる。

もう一人のバーバラ・マクリントックは受賞者の中では異例である。受賞者の半数以上が研究者と結婚している中で彼女は生涯を通し独身であったし、また女性では数少ない単独での受賞であった。彼女はトウモロコシの“転移する遺伝因子”トランスポゾンの発見によって医学生理学賞を受賞した。現在では植物だけでなくヒトに至るまですべての生物に普遍的な概念であることが分かっているが、1950年代のDNAの構造すら分かっていない時代にはその意義を認めることのできる人はいなかった。49才でこの“早すぎた発見”を発表するまでは、多くの研究成果を発表し女性として3番目のアメリカ学士院賞、遺伝学会の会長にも選ばれていた。ところがトランスポゾンに関する研究成果を発表した後学問上の孤立を強めた彼女は、業績を発表することをやめ精神的亡命を選んだ。しかし、学会から拒絶され続ける間も苛立つこともなく研究を続行した。1970年代の分子生物学的手法の導入に伴い彼女の発見は評価され始めノーベル賞を受賞することができたが、それは発見から30年以上も経った彼女が81歳の時のことであった。「朝起きて研究しに行くのが待ちきれ

ないほど、自分のしていることに関心を奪われました」という言葉に表されている様に、彼女にとって科学は生命であり生活そのものであったのだと思う。だからこそ、苦難の時代にも勇気を失わずに自分の信念に従って研究を続けることができたのだろう。

受賞者の一人、リタ・レヴィ=モンタルチニの言葉はとりわけ印象的であった。「決して何物も恐れてはいけません、未来をも。やるときには全身全霊を打ち込みなさい、中途半端はいけません。そしてその上であなたが自分の人生を誰と分かち合おうとするのかを十分慎重に考えなさい。そうすればあなたは、したいと思えば、主婦で、母親で、そして同時に科学者であることができるでしょう」。この言葉は女性だけでなく、すべての研究者を勇気づける言葉として心にとどめておきたい。

(さかい・あきこ 化学教室講師)

学術情報センター電子図書館システム (NACSIS-ELS) 説明会に参加して

宮本高行

平成9年度より学術情報センターが、電子図書館システム (NACSIS-ELS: National Center for Science Information System-Electronic Library Service) のサービスを開始するに先立ち、平成9年3月6日に大阪大学银杏会館にて、概要の説明会がありましたので報告致します。

文部省学術情報センターでは、学術審議会の建議「大学図書館における電子図書館的機能の充実・強化について」の内容に沿って、従来より行なわれてきた図書館の目録機能の電算化を主とした機械化 (NACSIS-IR, NACSIS-CAT等) に加えて、大学図書館の電子図書館化を推進する事業を本格的に推進し始めた。

電子図書館的機能の整備を実際面から考えてみると、その方策としては大きくは下記の三点が挙げられる。

- (1) 外部のデータベースや電子化資料の学内提供。例えば、外部情報へのアクセス方法手段を確保したり既存のデータベースサービスを自館に取り込む等の、外から内への情報の流れを、物理的財務的に整備すること。
- (2) 既存資料の電子化を行ない提供する。例えば、貴重書コレクションの画像化データベースを作り、電子博物館的サービスを行なうことにより、学術資料の保存対策と共用性を向上させ得るといった、内から外への情報発信サービスを行なうこと。
- (3) 現行学内資料 (紀要、論文、教材等) の電子化を推進し、また支援や組織化し提供することにより、研究者の活動を支援すること。

以上の観点を踏まえて、学術情報センターでは電子図書館化の一方策として、学術文献の電子化を行ない、ネットワークを通じて広く研究者に提供する「学術情報センター電子図書館サービス」を、開始することになった。

サービスの概要について。

サービス開始時期：平成9年4月。

サービス対象者：国公立等の大学、短期大学、高専の教職員、大学院生等。

サービス内容：現在国内29学会から62タイトルの学術資料のサービスが用意されており、今後学・

協会の意向によりサービスが増える予定。

実際に得られる情報は、書誌的データ（論文の標題・著者・著者所属機関名・収載雑誌情報・キーワード・抄録）と画像データ（雑誌文献の各ページをスキミングして作成したデータ）。

利用環境：インターネット接続であること。コンピュータは、UNIXワークステーションか、パソコンでWindows95機（平成9年度前半予定）か、Power Mac（平成9年度中予定）かの何れかの機種で、ページ画像を印刷出力するためには400dpi以上の画像出力が可能なプリンタが必要。

利用料金等：著作権料相当額の課金を予定しているが、平成9年度中は試行期間として無料である。

説明会では電子図書館システムの試験画面が、実際にインターネット接続された端末上においてデモンストレーションされました。現在のところ、全文データはオリジナル文献のイメージデータであり、文献自体をダウンロードしたり画面上でカットアンドペーストするなど云った電子化された情報とまでは行かないが、オンライン画面上で求める文献資料を検索し確認し、ハードコピーを即座に入手できるシステムとして確立しそうである。（みやもと・たかゆき 目録係主任）

古曲『宮蘭節』の由来について

門 田 雅 人

宮蘭節は『声曲類纂』に〔蘭八の舎弟宮蘭春太夫江戸にて一派をなし春太夫節として行われたり。これが弟子清八といへるは三味線の上手なりしが声よくして上るりを覚え、宮蘭千枝という天保五年午年終れり（原文のまま）〕との記載があり、この初代千之（枝）により、現在残る十段の浄瑠璃が伝えられたとされています。

また、初代千寿が文久元年に発行した『宮蘭千草種』に〔山城屋清八という江戸葎町の蔭間茶屋の主人が文政頃には大阪に行った際、物乞いが橋の袂で三味線を弾いているに興味を覚え、十段習い覚えて江戸に持ち帰ったのが宮蘭節の由来である〕と書かれてあります。

宮蘭節は初代鸞鳳軒（二代蘭八改め豊前）が宝暦十三年に『宮蘭都大全』を、更に明和六年には『宮蘭花扇子』を出して、京都を中心として宮蘭節は盛んに行われていました。その鸞鳳軒の死後、門下の文字太夫が二代鸞鳳軒を継ぎ、やがて文政頃には本家である上方の宮蘭節は衰微してしまいます。

江戸の宮蘭節がいかにして伝わったのか、確たる証拠は現存していません。『声曲類纂』にあるように、宮蘭春太夫が伝承したとして、ではこの春太夫が宝暦の末に江戸に下った春富士正伝の舎弟であるのか、宮蘭姓を名乗る以上宮蘭鸞鳳軒門下の人であったのか、ひとつの焦点となります。

このことについては、町田嘉章氏が指摘されたとおり、現存する十段が宮蘭鸞鳳軒直伝とされる曲が多いので、鸞鳳軒門下であったことに間違いはないでしょう。では、この春太夫はどんな人であったのか、『宮蘭花扇子』（初版）の宮蘭名譜では114名中65番目に春太夫という名が出てきます。また寛政頃に再版された『宮蘭花扇子』（二代目鸞鳳軒刊）では61名中11番目にその名があります。この春太夫が寛政頃に何らかの理由で江戸に下って宮蘭春太夫を名乗ったことは間違いありません。このことは山城屋清八が宮蘭節を学んだ時期が文化・文政頃と推測される時期に繋がっていきます。春太夫が江戸に下った頃には、既に春富士正伝は現役を退いており、『声曲類纂』にある蘭

八（正伝）の舎弟という関係は稀薄になってきます。春太夫は先輩である正伝の地盤である吉原を中心に活躍し、「春太夫節」として一時期の流行を残したのです。

初代蘭八の弟子であった春富士正伝は、江戸に下り正伝節としてその名を『声曲類纂』に残しています。正伝は二代蘭八が鸞鳳軒を名乗った後に、明和後期に江戸で三代蘭八を継ぎました。そのことに立腹した鸞鳳軒一派は『宮蘭花扇子』（再版）の略系譜から春富士正伝の名を削り取ってしまいました。

ここまでは資料に添い、順を追って整理することが可能でした。しかし、山城屋清八に宮蘭節を伝授したのはまちがいなくこの春太夫であったのでしょうか。

事実を調査していく内に『宮蘭花扇子』（初版）の宮蘭名譜の中で、114名中98番目に「千四」という名前を見つけました。この名前は初めて花扇子（天理図書館蔵）を見た折から注目していましたが、千四と初代千之を結ぶ証拠は何もありませんでした。最近、この千四は春太夫と共に江戸下りをした一門ではなかったかと思われるようになってきました。

文化・文政の頃には「春太夫節」は流行の下火にあり、清八を教えていた頃の千四は相当の年齢であったと推測できます。

清八は千四より宮蘭節を習っている途中で何らかの理由で稽古を続けられなくなった可能性が強いと考えられます。それは千四の側に原因があったのではないのでしょうか。

私論ではありますが、初代千之こと山城屋清八はこの千四より宮蘭節十段を習い、師の名前に従って千之（枝）を継いだのではないかと考えております。今は遠き昔のことではありますが…

（かどた・まさと 庶務課長補佐）

本学教職員等著作寄贈

（平成8年12月～平成9年3月分）

第1内科学教室

プロスタグランディン／大沢仲昭ほか 医典社 1986

太田 富雄教授（脳神経外科学）

“裸眼でみえる” 脳の三次元解剖アトラス／太田富雄ほか 金芳堂 1997

頭頸部MR Angiography／太田富雄ほか 金芳堂 1997

大阪医科大学仁泉会神戸支部

大震災／大阪医科大学仁泉会神戸支部 仁泉会神戸支部 1996

岡島 邦雄教授（一般・消化器外科学）

Dissection of the infraphyloric and superior mesenteric lymph node／Okajima, Kunio (VHSビデオ)

Left upper Abdominal evisceration for gastric cancer／Okajima, Kunio (VHSビデオ)

Lymph node dissection along the upper border of the pancreas／Okajima, Kunio (VHSビデオ)

Lymph node dissection around the pancreas／Okajima, Kunio (VHSビデオ)

Para-aortic lymph node dissection／Okajima, Kunio (VHSビデオ)

食道浸潤を伴う横門部癌に対する左開胸・開腹による下部食道・胃全摘術／岡島邦雄 (VHSビデオ)

植木實教授（産婦人科学）より、昭和38年度卒業生（三八会）の30周年記念事業として、図書館に50万円の寄付をいただき、辞書類53冊を購入しました。

最新医学大辞典／後藤稠 医歯薬出版 1996 他53冊



1. 看護専門学校図書室

1997年より下記の雑誌を新規購入しました。

看護診断 1 (1996) - 2 (1997) +

SEIKEI-GEKA KANGO (整形外科看護) 1 (1996) - 2 (1997) +

2. 進学課程図書室の呼称変更について

本学進学課程の呼称が「さわらぎキャンパス」と変更される事になりましたので、進学課程図書室の呼称を図書館「さわらぎ分室」と変更いたしました。

3. 図書館カードについて

図書館カードの有効期限が切れた方がありますので、申請書をカウンターに提出して、新しいカードを作成して下さい。

1994年9月時点で、専攻医・研究生・副手だった方。

今年、修了あるいは卒業された研修医・大学院生の方。

1994年9月から1995年3月までの間に、カードの申請をされた研究補助員（秘書）の方。

平成9年度図書館合同運営委員会委員 (平成9年4月1日現在)

図書館長 清金 公裕 (皮膚科学) / 基礎系 芝山 雄老 (第一病理学)、窪田 隆裕 (第二生理学) / 社会系 河野 公一 (衛生学・公衆衛生学) / 臨床系 陰山 克 (第二内科学)、植木 實 (産婦人科学)、麻田 邦夫 (胸部外科学)、末吉 公三 (放射線医学) / 学生部 鈴木 廣一 (法医学)、玉井 浩 (小児科学) / さわらぎキャンパス 千原精志郎 (心理学) / 看護専門学校 井原美保子、藤川 千洋 / 図書館 茂幾 周治、高橋美知代、松本 玲子

平成 8 年度 図書館統計

平成 8 年度 年間受入図書および製本冊数

	購入図書		製本雑誌		寄贈図書		計		合計
	和	洋	和	洋	和	洋	和	洋	
図書館	1031	375	1015	2383	278	49	2324	2807	5131
教室図書	41	10	0	0	0	0	41	10	51
研究費	452	166	0	0	0	0	452	166	618
計①	1524	551	1015	2383	278	49	2817	2983	5800
進学課程	477	3	43	250	40	3	560	256	816
研究費	64	365	0	3	0	0	64	368	432
計②	541	368	43	253	40	3	624	624	1248
合計①+②	2065	919	1058	2636	318	52	3441	3607	7048

受入カレント誌

	購入		寄贈		計		合計
	和	洋	和	洋	和	洋	
図書館	343	756	713	46	1056	802	1858
研究費	17	22	0	0	17	22	39
計①	360	778	713	46	1073	824	1897
進学課程	39	75	5	0	44	75	119
研究費	3	11	0	0	3	11	14
計②	42	86	5	0	47	86	133
合計①+②	402	864	718	46	1120	910	2030

図書館蔵書数

平成 9 年 3 月 31 日

	図書			雑誌 (所蔵タイトル数)		
	国内	外国	計	国内	外国	計
進学課程	28,412	24,896	53,308	217	125	342
専門	60,957	69,340	130,297	2,442	1,186	3,628
合計	89,369	94,236	183,605	2,659	1,311	3,970

図書館業務日誌

12月

- 12日 (木) 学術情報センターシンポジウムに館員参加 (於、大阪府立図書館)
13日 (金) 日本医学図書館協会企画・調査委員会 (於、京都府立医大)
16日 (月) 平成8年度大阪大学附属図書館職員研修会に館員参加 (於、大阪大学銀杏会館ホール)
18日 (水) ノンリニアビデオ編集システム装置をA.V.室に設置
19日 (木) 平成8年度第6回図書館合同運営委員会 (於、図書館会議室)

平成9年1月

- 16日 (木) 日本医学図書館協会総務会 (於、協会中央事務局)
17日 (金) 日本医学図書館協会基礎研修会実行委員会 (於、奈良医大)
20日 (月) 館報7号発行
23日 (木) 平成8年度第7回図書館合同運営委員会 (於、図書館会議室)
24日 (金) 日本医学図書館協会資料保存委員会 (於、大阪医大)

2月

- 6日 (木) 日本医学図書館協会理事会・評議員会 (於、東邦大学医学部)
19日 (金) 日本医学図書館協会企画・調査

委員会 (於、関西医大)

- 21日 (金) 学術情報センター目録システム講習会に館員参加 (於、京都大学薬学部)
25日 (火) 館報8号編集委員会 (於、図書館会議室)
27日 (木) 医学情報処理センター利用者会 (於、第2会議室)

3月

- 4日 (火) 学術情報センター電子図書館サービス説明会に館員参加 (於、大阪大学銀杏会館ホール)
7日 (金) 日本医学図書館協会基礎研修会実行委員会 (於、近大医学部)
10日 (月) 日本医学図書館協会総務会 (於、協会中央事務局)
19日 (水) 大阪薬科大学図書館施設見学 (館員2名)
21日 (金) 第68回近畿地区医学図書館協議会例会 (於、近大医学部)
27日 (木) 平成8年度第8回図書館合同運営委員会 (於、図書館会議室)

編 集 後 記

新学期も始まり、新緑の美しい季節になりました。さて、今回の館報8号は、トップ記事は阿部先生に、海外事情についての記事を久保川先生にお願いしました。また、新企画として、今回から他大学図書館の施設見学の記事を連載することにしました。その他の方も執筆にご協力頂き有りがとうございました。表紙のカットは今回も北村達郎氏にお願いしました。読者の方からのご意見をどしどしお寄せください。(茂幾)

OMNIBUS「大阪医科大学図書館報／大阪医科大学附属看護専門学校図書室報」

No.8 1997年5月20日 発行

編集・発行 大阪医科大学図書館

〒569 大阪府高槻市大学町2-7

TEL (0726) 83-1221 (代)

(内線2799, 2621)

印刷 大日本印刷株式会社